

2017年度 大阪教育大学男女共同参画推進事業 活動結果報告

教員養成系大学におけるセクシュアル・ダイバーシティに関する自主活動支援の試み
～LGBT 当事者・ALLY の学生サークルと連携して～

(代表者) 教職教育研究センター 准教授 神村 早織

1. 事業の目的

電通総研が平成 27(2015)年に発表した調査によれば、LGBT 層に該当する人は 7.6%と算出されている。学校現場においても LGBT 当事者の子どもたちが声をあげはじめ、学校の教職員もその理解と対応について学ぶことが求められている。文部科学省も、「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」(H27)、「性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について」(H28)等の対応を進めており、「性の多様性」に関する教職員の理解が求められている。これらの状況の下、本学も教員養成系大学として、LGBT 当事者の学生があらのままに生きることを支援し、また、LGBT 当事者の児童生徒を理解・支援する ALLY の立場の教職員を育てることが必要だと考える。

本学には、LGBT 当事者交流を目的としたサークル(ONESTEP)とLGBTの理解と啓発を目的としたサークル(FLOWER)があり、互いに連携して活動している。本事業は、本学附属図書館(本館)との協働によるリビング・ライブラリーの開催、学校現場の LGBT 当事者教員へのインタビュー冊子の作成等の企画について、この学生たちの自主的な活動を支援する事によって、「ウエルカミングアウトな学校づくり」(当事者がカミングアウトしやすい学校環境)の担い手となる教職員の養成を進める事を目的として試行的に実践するものである。

2. 活動実績

1) 図書館と学生サークル FLOWER の協働による LGBT 特集企画

本学附属図書館(本館)と FLOWER(学生サークル)との協働による LGBT 特集企画として、11月 20日から12月 15 日にかけて、全体テーマを「今日は、図書館がカラフルになる」と題して実施した。ここでは、「リビング・ライブラリー」「展示・虹色 BOOKLIST—多様な性を生きる—」「LGBT 関連資料の特集展示」の 3 つの企画を展開したが、詳細は以下に述べる。なお、これらの企画は、LGBT をテーマに行われた平成 29 年度全学人権シンポジウムと連携して、人権週間を中心に取り組んだものである。以下、個別の企画について、学生が図書館との協働により作成した紹介文を掲載する。

◆第1企画 リビング・ライブラリー「今、ここでしか読めない本(ひと)がいる」

- ・12月 6日(水) 13:00-16:00 附属図書館(柏原キャンパス)2階 まなびのひろば
- ・LGBT 当事者や理解者が「本」となり各自の経験を話します。参加者は「読者」となり興味のある「本」を読んでもらいます。「本」役は、外部から5名(当事者教員)と Flower メンバー10名(本学学生)が行います。性はグラデーションと言われるように、一人一人違った経験をしてきています。それをリアルに感じ取れる企画にもなっています。

◆第2企画 展示「虹色 BOOKLIST—多様な性を生きる—」

- ・11月 24日(金)—12月 7日(木) 附属図書館(柏原キャンパス)地下1階 たまごギャラリー
- ・12月 6日に行われるリビング・ライブラリーで「本」となる人の紹介を行う場になります。「本」役の人の

写真パネルと一緒に本の帯に当たるような簡単な本のあらすじを紹介します。LGBTを象徴するレインボーで、生協アイリスの隣の「たまごギャラリー」を彩りたいと思います。

◆第3企画 LGBT 関連資料の特集展示

- ・11月20日—12月15日 附属図書館(柏原キャンパス)1階 特集展示コーナー
- ・LGBT 関連の書籍を集めて特集展示します。LGBT について学ぶ授業も多く、このテーマに興味を持つ学生も増えてきています。関連資料をまとめて展示することで、書籍を手に取りやすくなり、多様な性のことを知る機会になると思います。

2)リビング・ライブラリー

メイン企画の「リビング・ライブラリー」は、直訳すれば「生きている図書館」。その名の通り「生きている本」を貸し出す図書館のことである。基本スタイルとしては、まず、様々な社会的背景を有している人たちに「生きている本」として登録していただく。「読者」は自分の関心にあわせて「生きている本」のリストの中から予約し、「本を読む」。例えば、一回三十分の「場」で、その方の物語を聴く時を過ごすのだ。活字を読む従来の図書館との違いは、そこに対話が生まれることだ。二十年程前にデンマークで始まったというこの取り組みは、世界各国で広まりを見せている。

今回は、本学図書館のスペース「まなびのひろば」を活用して、開催した。本学のLGBT当事者学生及びALLY(支援者)の学生を中心に、多様なセクシュアリティ、多様な支援の活動をおこなっている方々をお招きし、計15冊の「本」のリストを揃えることができた。当日は、延べ87名(実人数54名)の参加があったが、「まなびのひろば」の温かな雰囲気の中で、幾つものブースに別れて少人数で語る・聴くスタイルは、参加者を勇気づけ、対話的な学びをより深めることができた。

3)インタビュー冊子「こんにちは多様な性を生きる先生たち」の作成

文科省からの通達もあり、学校におけるLGBTの児童生徒に対する理解と支援については、その重要性が広まりつつある。しかし、学校におけるLGBT当事者は児童生徒だけではない。当然のことながら、教職員の中にもLGBT当事者はおり、今、自らのセクシュアリティを公表して、ありのままの自分で生きようとするLGBT当事者の教職員ネットワークも広がりつつある。これは、当事者の児童生徒にとってはもちろんのこと、教職をめざすLGBT当事者学生にとっても、教師としての夢と希望をつなぐ力強いロールモデルとなっている。

学生サークルFLOWERでは、サークル内の希望者によりインタビュー班を結成し、7つのチームに分けて、関西圏の小・中・高等学校の教員等にインタビューを実施した。性の4軸モデルを用いてセクシュアリティを説明していただくスタイルは、Re-bit(早稲田大学の学生サークルから出発し、現在はNPO法人)が作成した教材を参考にして、学生たちが考えたものである。セクシュアリティの気づき、カミングアウトについて、大教大生へのメッセージ等は共通質問としたが、それ以外は、おひとりおひとりの経験に沿った形で聴き取らせていただいた。

この冊子の作成過程で興味深いことがあった。冊子本文には掲載していない部分だが、インタビューを行った学生たち自身が、自らの悩みを聴き取っていただいている場面が随所にみられるのである。インタビュアーとインタビューイーの双方に、当事者性があると自覚しているからこそその化学反応と臨場感があり、学生たちの学びには大きいものであった。

4) 日本人権教育研究学会での報告

第 18 回日本人権教育研究学会(8 月)において、「教員養成系大学における性的マイノリティの学生支援—LGBT 当事者・ALLY 学生の自主活動と連携して—」と題して、中間報告を行った。本学の学生サークル FLOWER が、河嶋(2014)が調査した全国の大学におけるLGBT学生サークルの状況の中で、人権啓発・ネットワーク・社会変革を目的とする「アクション型」の類型に相当すること、そして、支援者としての大学教職員のあり方として「側面的支援及び学内外の組織との媒介」を行うイネブラーとして機能していることを紹介した。

3. 結果・考察

今回の事業では、①教員養成大学として、LGBT 当事者の学生が教職員としてありのままに生きることを支援し、また、LGBT 当事者の児童生徒を理解・支援する ALLY の立場の教職員を育てること、②学生たちの自主的な活動を全学で共有することによって、「ウエルカミングアウトな学校」(当事者がカミングアウトしやすい学校環境)の担い手となる教職員の養成に資する事を目的としていた。

成果としては、まず、図書館との協働や人権シンポとの連携など、大学の学生支援の文脈の中で活動を進めることができたことである。これまで東京学芸大学、愛知教育大学等、他大学の LGBT サークルとの交流の中で、本学の活動で欠落していると感じていたことは大学の組織とのつながりであった。今回成果のあった事例として分かりやすいものに、図書館から「特集展示」の図書の購入希望リスト作成を提案していただいたことがある。学生たちの喜びは大きく、社会に対してコミットすることの有用感につながった。特に、当事者学生は、自分のセクシュアリティについて悩んでいた時に、図書館に関連図書が少なく残念な経験をした者が多く、「特集展示」が始まると記念写真を撮るものも多いたほどである。また、写真サークル「Film」には、メッセージ・ボードを持った写真の撮影を協力していただいた。こうして、大学の学生支援や各組織との協働の活動をとおして、学内に LGBT の理解・支援環境が醸成される事を今後も期待したい。

また、成果の二点目として、当事者性のある先生たちのインタビュー活動の成功と、次年度以降のインタビュー活動定着化である。今回は、インタビューの対象教員の選定と依頼までは、教員が学生支援の一環として行った。しかし、次年度からは、定例の活動としてインタビュー活動を行っていくために、サークルの組織体制も整え、インタビューの対象となる方とのつながりをつくることから、学生自身が行うこととなった。つまり、大教大の学生が、大学から外の社会にでかけて、様々な活動の場で、積極的に人脈をつくっていくのである。将来、「ウエルカミングアウトな学校」(当事者がカミングアウトしやすい学校環境)の担い手となる教員を養成するためには、こうして自ら社会にコミットする経験を積むことが必要である。日高(2014)は、大学が担う支援的環境整備として、学生サークルが「当事者交流」から可視化された「活動的存在」へとなるように支援する必要があると述べている。LGBTの学生支援のあり方として、自主活動の学生支援が更に広まることを期待したい。

参考:

- ・「性的マイノリティの学生支援における課題」河嶋静代(2014) 平成 26 年度ジェンダー問題調査・研究支援事業報告書 北九州市立男女共同参画センター
- ・「LGBT 学生の存在を考える: キャンパス内でのダイバーシティ推進のために」日高庸晴(2014) 大学時報 63(358), 76-83, 2014-09 日本私立大学連盟